

IAIS 市中協議文書 「気候リスク監督ガイダンス(パート2)」に意見提出

日本損害保険協会(会長:新納 啓介)は、保険監督者国際機構(IAIS)が2023年11月23日から2024年2月23日にかけて市中協議に付した「気候リスク監督ガイダンス(パート2)」に対する意見を提出しました。

1. 市中協議文書の概要

- ・ 気候関連リスク監督の国際的に一貫したアプローチを推進し、保険監督の国際的な枠組みにおけるギャップに対処するために、IAIS では、様々な保険基本原則(ICP)(※1)に関連するガイダンスの限定的な変更案および新たな支援文書について、2023 年から 2024 年にかけて計 3 回にわたり市中協議を行うことを予定している。
- ・ 今回の市中協議は、以下2点のアプリケーション・ペーパー(AP)(※2)を対象としている。
 - ▶ 保険セクターにおける気候リスクのマーケットコンダクト課題に関する AP
 - ▶ 保険セクターにおける気候リスクのシナリオ分析に関する AP

2. 損保協会意見(抜粋)

- ・ (マーケットコンダクト課題に関する AP) 気候変動に関連するマーケットコンダクトについて新たな監督・規制の枠組みが必要というわけではなく、基本的には消費者保護のための既存の規制・監督のスコープに含まれるものと考える。
- ・ (シナリオ分析に関する AP) 気候関連シナリオ分析は、比較的新しい分析方法であり、保険監督への導入 や保険会社の具体的な意思決定への活用、および分析結果の対外開示に向けては、手法や使用するデー タが未だ十分には確立・整備されていないと理解している。今後、各国当局や保険会社間で試行錯誤を 行いながら精錬していく必要があると考える。

当協会は、IAIS における国際保険監督基準策定の議論に積極的に参加しており、今後も市中協議等に際して本邦業界の意見を表明していきます。

(※1)保険基本原則

保険セクターの健全性を促進し、適切に保険契約者を保護するために必要な保険監督にあたっての基本原則などを定めた、IAISの監督文書であり、あらゆる保険グループおよび保険会社を対象としている。

(※2)アプリケーション・ペーパー

IAIS の監督文書(ICP、ComFrame 等)の特定のテーマに関して、原則や基準の一律な解釈や適用が難しい場合に、事例やケーススタディの提供を目的に作成される文書。助言や具体例、推奨、事例などを含む。



保険セクターにおける気候リスクのマーケットコンダクト課題に関するアプリケーションペーパー

番号		損保協会意見(和文)	損保協会意見(英文)
1	気候リスク市場における保険セクタ	本アプリケーションペーパーは、気候変動に関連する	While this AP focuses on market conduct related to
	一の行動問題に関する AP に対する	マーケットコンダクトに焦点を当てているが、各法域	climate change, it is our understanding that each
	一般的意見	においては消費者を保護するための規制が既に実施さ	jurisdiction already has regulations in place to protect
		れ、それに基づいて適切な監督がなされていると理解	consumers and appropriate supervision based on these
		している。気候変動に関連するマーケットコンダクト	regulations. Therefore, a new supervisory and
		について新たな監督・規制の枠組みが必要なのではな	regulatory framework is not needed for climate risk
		く、基本的には消費者保護のための既存の規制・監督	market conduct, which is essentially within the scope of
		のスコープに含まれるものと考える。	existing regulations and supervision for consumer
			protection.
5	セクション 1.3 比例原則(プロポ	マーケットコンダクト課題に関する保険監督につい	We agree that it is important to consider the
	ーショナリティー)に関するコメン	て、比例原則を考慮することは重要であり、各法域の	proportionality principle in insurance supervision with
	F	市場の状況に応じて柔軟な対応が行われることについ	respect to market conduct issues, and that flexibility is
		て賛同する。また、同じ消費者でも、個人(リテー	ensured to respond to market conditions in each
		ル)や小企業(Small Business)と大企業では知識や認	jurisdiction. In addition, among consumers, individuals
		識のレベルに必然的に差異が生じることも踏まえた対	(retail), small businesses, and large businesses, will
		応が求められると考える。	inevitably differ in their level of knowledge and
			awareness. This difference should be taken into account
			in supervision.
7	セクション2 グリーンウォッシン	グリーンウォッシングは、消費者保護、また、健全な	Greenwashing is an extremely serious issue for
	グの考慮事項に関するコメント	保険市場にとって極めて深刻な問題であり、一部法域	consumer protection and a sound insurance market.
		では規制化に向けた動きがあるなど、積極的な取組み	Some jurisdictions are actively taking measures to
		が行われている。ただし、パラグラフ 10 に記載されて	address it, including movement toward legislation.
		いるように、必ずしも「グリーンウォッシングが社会	However, it is not necessarily appropriate to determine
		一般(society in general)によって広く認識(widely	that "greenwashing is widely recognised bysociety in
		recognised) されている」と整理できる状況ではな	general" (as stated in Paragraph 10). In addition, the



	T		アンノ 血目がイグマン (パート 2/)」に因うる頂体励云心尤
		く、また、グリーンウォッシングの詳細な定義や、対	detailed definition of greenwashing and the nature and
		応の内容・程度は、法域によって異なると思われるた	extent of responses to it are likely to vary from
		め、保険監督においても、各法域の法規制や市場の状	jurisdiction to jurisdiction. Therefore, insurance
		況を十分考慮することが望ましいと考える。	supervisors should give due consideration to the laws
			and regulations and market conditions of each
			jurisdiction.
8	セクション 2.1 グリーンウォッシ	各法域では、消費者を保護するための規制が既に実施	Each jurisdiction already has consumer protection
	ングのイントロダクションに関する	され、それに基づいて適切な監督がなされていると理	regulations and appropriate supervision in place based
	コメント	解している。グリーンウォッシングについても、先ず	on these regulations. For greenwashing, we agree with
		は既存の規制・監督の枠内での対応を検討し、その上	the approach of first considering how to respond within
		で、新たなツール・政策・規制が必要かを検討すると	the framework of existing regulations and supervision,
		いうアプローチに賛成する。	and then examining whether new tools, policies, or
			regulations are required.
		また、パラグラフ9にある「持続可能性を備えた消費	
		者の欲求の高まり」を客観的な事実やデータで示した	In addition, we suggest adding objective facts and data
		方がより説得力が増すと考えられるため、それらを追	regarding "An increase in consumer appetite for
		記した方が良いと考える。なお、地域によって高まり	products with sustainability features" in Paragraph 9 to
		の程度が異なる可能性がある点も留意する必要があ	make the description more persuasive. It should be
		వ 。	noted that the degree of any such increase may differ by
			region.
9	セクション 2.2 サステナビリティ	グリーンウォッシングへの対応には、その定義や類型	In responding to greenwashing, it would be useful to
	に関する明確で強固な定義と基準に	を明確にし、商品が持続可能性の特徴を有するかの判	clarify its definition and characteristics, to create
	関するコメント	断のための共通の基準を作ること、また、より多くの	common criteria to determine if a product has
		具体例を明示することは有用と考える。ただし、その	sustainable features, and to describe additional
		過程において、当該法域の法制度や市場の特性を十分	concrete examples. On the other hand, as part of the
		に考慮するのが望ましいと考える。	process, it would be desirable to fully consider the legal
			system and market characteristics of each jurisdiction.



グリーンウォッシングの定義やグリーンウォッシング 共通の特徴のリストの策定推進にあたっては、保険セクター単独ではなく、保険以外の金融セクターや金融 以外のセクターとも、業界の垣根を超えて幅広く協力 する必要がある。各法域が定める定義の前提となるようなハイレベル原則等を国際的に決め、それを基に各 法域の状況を考慮しながら各法域に合った定義を定め た方が良いのではないかと考える。

当局が基準策定を推進する際は、保険業界を含めたステークホルダーとも連携すべきである。保険商品の種類によって設定できる基準が異なる可能性があることも考慮する必要がある。

パラグラフ 24 に、ミスリーディングを招く持続可能性 に関する表明の例が 3 点あげられているが、2 点目と 3 点目も、1 点目に合わせて、「虚偽の広告」 (deceivingly advertising) や「不正確な強調」

(incorrectly highlighting) などといった表現にし、ミスリードである点を明確にしてはどうか。更に、2点目は「裏付けとなる情報を伴わず(with no supporting information)」を付記することを提案する。また、カーボンニュートラルが例示されているが、ミスリーディングな例と捉えられる恐れがあるため削除を提案する。

In promoting the development of a definition of greenwashing and a list of its common characteristics, it is necessary to cooperate with other financial and non-financial sectors across industry boundaries rather than the insurance sector alone. It would be better to establish a set of high-level principles, etc. at the global level, on which each jurisdiction's definition is based, and then develop a definition appropriate to each jurisdiction, taking into account the specific circumstances.

Supervisory authorities should also work with stakeholders, including the insurance industry, when promoting the development of standards. Consideration should also be given to the possibility that different standards could be set depending on type of insurance product.

As for the three examples of what sustainability representations may portray in a misleading way (in Paragraph 24), the second and third points should be revised in line with the first point, by using expressions such as "deceivingly advertising" and "incorrectly highlighting", etc. to clarify that they are misleading. Furthermore, we suggest adding "with no supporting information" to the second point. In addition, we suggest



	_	体院监目有国际候件(IAIS)「XIK!	リスク監督ガイダンス(ハート 2)」に関する損保協会息見
			deleting the reference to "carbon neutral" in the second
			point, as it may be taken as a misleading example.
10	セクション 2.3 一定の契約者要件	当該セクションの推奨(Recommendations)の内容	The contents of "Recommendations" in this section are
	を満たす持続可能な機能を備えた商	は、一部法域の特定の商品に関する記載であり、世界	descriptions of specific products in some jurisdictions,
	品の提供に関するコメント	の法域の商品全般に当てはまるものではないと思われ	and do not seem to apply to products in general in
		る。したがって、パラグラフ 35 から 41 については、	jurisdictions around the world. Therefore, we suggest
		「このような取組みを行っている法域もある」ことを	clarifying that Paragraphs 35 - 41 are aimed at
		紹介することを目的とし、推奨からは独立してコラム	introducing the fact that there are jurisdictions that are
		的に記載する構成としてはどうか。	taking such measures, by positioning these paragraphs
			in a column/box separated from the Recommendations.
		パラグラフ33に、「製品設計プロセスのどの段階にお	
		いても」監督者はグリーンウォッシングのリスクの有	While Paragraph 33 states "Supervisors should review
		無について検証すべき、とあるが、既に消費者保護の	whether there is a risk of greenwashing in any stage of
		ための規制・監督が適切に実施されているにもかかわ	the product design process", when regulations and
		らず、持続可能性についての検証に過度に時間をかけ	supervision are already appropriately in place to protect
		ることのないようにするべきである。	consumers, excessive time should not be spent
			verifying sustainability.
		パラグラフ35に、「製品の持続可能性の特徴が、対象	
		市場の持続可能性の選好または目的に沿っているかど	While Paragraph 35 states "Insurers should assess
		うかを評価すべきである」とあるが、持続可能性選好	whether the product's sustainability features are in line
		度を計測することは困難であり、これを基準に商品開	with the sustainability preferences or objectives of the
		発・設計に制限がかかることに反対する。顧客ニーズ	target market", it is difficult to measure sustainability
		に合った商品を提供することは持続可能性に限らず保	preferences, so we oppose any restrictions on product
		険会社に求められていることであり、その原則に従っ	development and design on this basis. In the first place,
		て行動することと理解している。また、コマーシャル	insurance companies are required to offer products that
		分野はニッチなニーズに対するアジャイルな商品開発	meet customer needs, not only from a sustainability
		が求められる側面があり、特に新種、スペシャルティ	perspective, and act in accordance with this principle. In



保険においてはベストプラクティスが存在しないケー addition, it should be noted that, in commercial lines, スも想定できるため、対応が困難な可能性があること insurers may be required to develop products in an agile manner for niche needs, and especially in specialty and に留意する必要がある。 miscellaneous casualty insurance, etc., best practices パラグラフ36で記載されている、ガバナンス may not exist in some cases, which could make (governance) とは、具体的にどういうものを指すの insurance companies' response difficult. かご教示いただきたい。 What "governance" specifically means in the context of パラグラフ37に、「製品評価では、持続可能性選好と Paragraph 36 should be clarified. 投資リスク選好の両方が、ターゲット市場のニーズ、 As for Paragraph 37 ("...the product assessment should 目的、特性と整合していることを確認する必要があ る。例えば、持続可能性の選好に対処するために選択 ensure that both the sustainability preferences and された投資戦略は、製品の投資の全体的なリスクレベ investment risk appetite are aligned with the target ルに影響を及ぼす可能性がある。」とあるが、生命保 market's needs, objectives and characteristics. For 険会社の特別勘定や損害保険会社の積立勘定の保険商 example, the investment strategy chosen to address the 品に関する投資を想定しているのか、あるいは一般勘 sustainability preferences may impact the overall level 定も含めた投資を想定しているのかをご教示いただき of risk of the investments of a product"), please indicate たい。また、理解促進のため、より具体的な例をお示 whether this description refers to investments in relation しいただきたい。 to products in separate accounts of life insurance companies and in savings accounts of non-life insurance companies, or whether it refers to investments including general accounts as well. Also, please provide more specific examples to facilitate understanding. セクション 2.4 保険会社が顧客獲 11 パラグラフ 44 では保険会社のサステナビリティ関連取 While Paragraph 44 encourages insurers to report on 得のために独自の持続可能性プロフ 組みの誇大表示の防止のために、保険会社に対してサ progress in meeting their sustainability-related ステナビリティ関連コミットメントの進捗報告を推奨 commitments to prevent overstatement of sustainability-



		FINALE E E ENAUXIII () - 7.4174.7	
	ァイルを売り込むことに関するコメ	しているが、進捗報告自体がよい開示とみせかけるた	related initiatives, such a report itself could induce
	ント	めに誇大表示を行う誘因ともなり得るため、「裏付け	overstatement to make their initiatives look better.
		となる情報を伴う進捗報告を奨励することができる」	Therefore, we suggest revising the sentence, for
		(may encourage insurers to report on progress,	example, as follows: "may encourage insurers to
		backed by fact-based supporting information, in meeting	report on progress, backed by fact-based supporting
		their sustainability-related commitments) といった表現	information, in meeting their sustainability-related
		への修正を提案する。	commitments".
12	セクション 2.5 保険契約者に提示	サステナビリティに関する保険商品や保険会社の活動	It is extremely important to explain the rationale for
	される持続可能性表示の実証に関す	について、消費者に誤解を与えないよう、サステナビ	sustainability representations and to provide relevant
	るコメント	リティ表示の根拠を説明することや、関連情報をタイ	information in a timely manner so as not to mislead
		ムリーに提供することは極めて重要であり、その実現	consumers about insurance products and insurers'
		のため、法域内での共通の枠組・基準を策定すること	activities with respect to sustainability. To this end, it
		は有用であると考えるが、それに向けては当該法域の	would be useful to develop a common framework and
		法制度・規制や市場特性が十分検討されるべきであ	standards at the jurisdictional level in which the legal
		る。	system, regulations, and market characteristics of the
			jurisdiction in question should be fully considered.
		パラグラフ 50 で、共通のサステナビリティ規範フレー	
		ムワークの要素として、全ての投資プロダクト(all	In Paragraph 50, sustainability disclosure requirements
		investment products)に対するサステナビリティ情報	for all investment products are included as one of the
		開示要求を挙げているが、全投資プロダクトでは範囲	elements of a common sustainability normative
		が広すぎるため、持続可能性を謳う商品に限定してよ	framework. The scope ("all investment products") is too
		いと考える。	broad, and should be limited to products claiming
			sustainability.
		パラグラフ 52 で、監督者は、いかなる(any)サステ	
		ナビリティ関連情報について開示を求めるべきとある	While Paragraph 52 states "Supervisors should also
		が、範囲が広すぎると考える。「いかなる」(any)か	require that any sustainability-related information is
		ら「重要な」(material)への言いかえを検討いただき	provided", the scope is too broad. We suggest replacing



たい。 "any" with "material". While Paragraph 55 describes information to be パラグラフ 55 で、保険商品を組成する、投資ファンド のパンフレットに含むべき情報が記載されているが、 included in investment fund brochures related to アプリケーションペーパーの性質に照らして過度に詳 insurance products, in light of the nature of an 細である。また、当該記載は一部法域の事例に関する application paper, the description is excessively 記載になっていると思われ、世界の法域全般に当ては detailed. In addition, it seems to relate to cases in some まらないと考えられる。したがって、当該パラグラフ jurisdictions and is not considered to be applicable to all の2文目を、「監督者は、投資パンフレットに、各法 jurisdictions in the world. Therefore, we suggest revising 域の市場の特性を踏まえた、サステナブル投資に重要 the second sentence of the paragraph as follows: な情報を含むことを求めることができる、例えば」 "Taking each market feature into account, supervisors could require that investment fund brochures include (Taking each market feature into account, supervisors could require that investment fund brochures include information which is considered critical for sustainable information which is considered critical for sustainable investment, for example:". Subsequently, it should be investment, for example) と修正し、4点の箇条書きは clarified that the following four bullet points are intended to show examples. 例示との位置付けにすべきである。 14 セクション 3.1 自然災害の考慮事 本セクションでは、自然災害に関する新たなコンダク In this section, some examples are cited as emerging conduct risks for consumers because of NatCat. Many 項のイントロダクションに関するコ トリスクとして幾つかの事例が挙げられているが、そ メント の多くは消費者の認識・理解度の低さに係るものとさ are thought to be related to low awareness and limited understanding among consumers. Improving consumer れている。消費者の認識を高めることは極めて重要 で、民間保険セクターの果たすべき役割は大きいが、 awareness is extremely important, and the private 官も含めたマルチステークホルダーで取り組むべき課 insurance sector has a great role to play in this, but it is 題であると考える。なお、消費者の認識が低いこと自 an issue that should be addressed by multiple stakeholders, including the public sector. Furthermore, 体は、必ずしもコンダクトリスクに該当する訳ではな いと考える。 we consider low consumer awareness itself does not necessarily constitute a conduct risk. また、NatCat の頻度・深刻度の増加による保険料の上



			ノスク監督ガイダンス(ハート 2)」に関する損保協会息見
		昇もコンダクトリスクとして挙げられているが、再保	Sudden price increases due to the increased frequency
		険市場など外部環境の要因も大きく、また、リスクを	and scale of NatCat events is also cited as a conduct
		適正に反映したものであれば、必ずしもコンダクトリ	risk. However, external factors such as the reinsurance
		スクに該当するものでは無いと考える。この課題も、	market also play a major role, and if the risk is properly
		官民のマルチステークホルダーで解決していく課題と	reflected, it does not necessarily fall under the category
		認識している。	of conduct risk. We recognize that this issue is also one
			that must be resolved by multiple stakeholders in the
			public and private sectors.
15	セクション 3.2 平易な言葉を用い	消費者の保険商品・補償内容の関する理解度を高める	In order to narrow protection gaps, it is important to
	た、理解しやすい商品を提供に関す	ことは、補償ギャップ縮小に向けて重要であり、その	improve consumer understanding of insurance products
	るコメント	実現に向け、平易な文言を用いた理解し易い商品の提	and coverage. To achieve this, it is useful to provide
		供が有用である。	easy-to-understand products using plain language.
		パラグラフ 66 は、過度に規範的であり、初めの一文以	As what is explained in Paragraph 66 is overly
		外を削除することを提案する。	prescriptive, the second and subsequent sentences of
			the paragraph should be deleted.
		パラグラフ 67 で、監督者が「類似事象」のようなあい	
		まいな用語がないか監督すべきとしているが、種々の	While Paragraph 67 states that supervisors should
		事象を列挙した上で「およびこれらに類似の・・・」	monitor to ensure that vague terms such as "similar
		といった文言は実務上は多くの約款に使われている。	events" are not used, in practice, many clauses use
		これらをすべて機械的に排除することは現実的ではな	wording such as "and similar thereto" after listing
		いと考える。消費者に誤解を招くことのない用語を使	various elements. It is not realistic to mechanically
		用すべきであることは保険会社の責務であり、既存の	eliminate all of these. It is the responsibility of insurance
		消費者保護の規制・監督の枠内で適切に実施されてい	companies to use terms that are not misleading to
		ることを自然災害においても実施することを言ってい	consumers. We understand this paragraph to mean that
		るものと理解する。	what is done appropriately within the framework of
			existing consumer protection regulations and
	•	•	•



なお、保険会社がリスクエクスポージャーを制限する supervision should also be done in the context of natural ために新たな免責事項を導入することが「リスク」と disasters. 表現されているが、エクスポージャーのコントロール は保険会社のリスク管理として極めて重要な機能であ The introduction of new exclusions to limit risk exposure is described as "risk", but controlling exposure is an り、保険会社の観点では、その行為自体はリスクには 該当しないと考えられる。そのため、パラグラフ 64 の extremely important function of insurer risk management, and from the standpoint of insurers, the 第 1 文の「リスクが増大している」(there is an increasing risk) を「事例がみられる」(there are act itself does not constitute risk. Therefore, we suggest some cases)のように修正することを提案する。 revising the first sentence of Paragraph 64, for example, as follows: "At the same time, there are some cases that insurers may...". セクション 3.4 アフォーダビリテ 手頃な価格での保険の提供(アフォーダビリティ) The provision of affordable insurance coverage 17 ィに関するコメント は、補償ギャップ解消に向けて重要である。ただし、 (affordability) is important to closing protection gaps. NatCat イベントの頻度・深刻度が高いレベルにある場 However, when the frequency and severity of NatCat 合には、それに見合った適切な保険料を設定すること events are at high levels, premiums are to be set to になる。また、気候変動に伴う不確実性から数理モデ appropriately reflect such conditions. It is also ルによるリスク計測にも限界があり、更に、再保険市 necessary to consider the facts that there are limits to 場など外部環境の影響も大きく受けることにも留意が risk measurements using actuarial models due to 必要である。保険会社だけでの対応には限界があり、 uncertainties associated with climate change, and that マルチステークホルダーでの取組みが必要である点も there is significant impact of the external environment, such as the reinsurance market. In addition, the AP 言及すべきと考える。例えば、政府・自治体・保険会 社などの防災減災の取組みにより損害を減らすことが should also refer to the limitations on what insurers can できれば、結果として保険料を下げることにつながり do alone, and the necessity of multi-stakeholder efforts. 得るのではないかと思われる。 For example, if disaster prevention and mitigation efforts by national and local governments, as well as insurance companies can reduce damages, this could result in lower insurance premiums.



18 セクション 3.5 アクセスに関する

消費者が適切な保険商品にアクセスできるよう、消費者の意識・知識を高めることは重要であり、監督者・ 保険会社を含めたマルチステークホルダーの取組みが 求められると考える。

保険会社が消費者のニーズに応えて、自然災害カバーを提供することは、消費者保護の観点から重要であるが、一方で、保険会社の資本・ソルベシーやリスクプロファイルに応じて自社で保有できるエクスポージャーには限界があり、また、再保険マーケットの状況によっても、提供できる補償に影響を受ける点についても考慮されるべきである。

パラグラフ91に「あいまいな契約の文言による損失を避けるため、異なるタイプの消費者のニーズや目的を考慮すること無く、契約条件を定期的に見直している」(第2文)との記載があるが、このような行為が世界の法域で一般的に行われているとは考え難く、誤解を生む表現のため、削除すべき。また、第1文に「あいまいな契約条件による損失を避けるため、見直しを強いられることが良くある」とあるが、これも世界の法域で一般的な事象とは考え難く、「契約条件の意図しない解釈による更なる損害を回避するため(to avoid further losses due to unintended interpretation of contractual terms)」、「保険会社は見直しを行うこともある(insurers may review)」といった表現に変えることを提案する。

As it is important to improve consumer awareness and knowledge so that they can access appropriate insurance products, efforts of multiple stakeholders, including supervisors and insurers, are required.

It is important from a consumer protection perspective for insurers to provide NatCat cover in response to consumer needs. On the other hand, consideration should be given to the fact that there are limits to the exposure that insurers can retain depending on their capital, solvency, and risk profile. Furthermore, conditions in the reinsurance market can also affect the coverage they can provide.

While the second sentence of paragraph 91 states "Such reviews are regularly carried out without taking into account the different types of consumer needs and objectives", it is unlikely that such regular reviews are conducted generally in jurisdictions across the world. The sentence should be deleted, as it is misleading. In addition, while the first sentence states "insurers are often required to review their terms and conditions to avoid losses due to ambiguous contractual terms", this is also not a general practice in jurisdictions across the world. We suggest changing the phrases to "to avoid further losses due to unintended interpretation of contractual terms" and "insurers may review", etc.



パラグラフ 92 について、監督者が、自然災害を補償す As for Paragraph 92, when supervisors develop and use tools to make it easy to compare insurance products る保険商品の比較を容易にするツールを開発・使用す る場合は、特定の保険会社の商品を勧めることになら offering NatCat protection, it is necessary to be cautious ないように注意する必要がある(適切に比較できない not to recommend products of specific companies. If an のであれば、ツールを開発すべきではない)。 appropriate comparison is not ensured, such tools should not be developed. パラグラフ 95 について、保険会社が、商品の開発・見 直しを行う際には、マーケットのニーズ等を考慮に入 As for Paragraph 95, while insurers need to take market れることも必要だが、状況によっては当該リスクが補 needs and other factors into account when developing and reviewing their products, they also need to consider 償可能(insurable)ではなくなっている可能性がある the possibility that certain risks may no longer be ことも考慮する必要がある。 insurable under particular circumstances. セクション 3.6 適時かつ公正な保 自然災害発生後の「ビルド・バック・ベター」はレジ 19 "Build Back Better" after a natural disaster is an 険金請求処理に関するコメント リエントな社会の実現のために重要な取組みであり、 important initiative to develop a resilient society, and the その推進に向けた保険の活用もオプションの一つと考 use of insurance is an option to promote this initiative. える。本課題は、民間セクターだけの取組でなく、財 This issue is not a matter for the private sector alone, and the involvement of the public sector, including 源も含めパブリックセクターの関与も併せて論議され る事項と考える。 funding arrangements, etc., should also be discussed. Given that claim payments after a widespread natural 広域自然災害発生後の保険金支払は保険会社にとって 極めて重要であり、保険契約者からの保険金請求の利 disaster are extremely important for insurers, utilization 便性向上を目指したデジタル化や、損害調査の迅速化 of the latest technologies, such as digitization to のための AI の利用など、最新のテクノロジーの活用も improve policyholder convenience in making claims, and 有用であると考える。 the use of AI to speed up damage assessment, would be beneficial.



アプリケーションペーパーは、監督 当局および保険者にとって有用なツ ールとなるよう十分な詳細を提供し ているか。

本アプリケーションペーパーは、マーケットコンダク トに焦点を当てているため、消費者の要望に応えるこ とを強調していることは理解する。一方で、保険会社 としては、マーケットコンダクトの遵守を前提とし て、適切な商品設計(含む免責の設定等)やプライシ ング、また、リスク管理や資本・ソルベンシー管理な どを行う必要もあり、このような既存のプルーデンス の枠組における対応の観点での検討も、アプリケーシ ョンペーパー内で触れた方が良いと考える。また、補 償ギャップ解消については、官民のマルチステークホ ルダーで解決すべき大きな課題であり、保険会社・保 険仲介者のコンダクトだけで解決できるものでは無い と理解している。この点についても、本アプリケーシ ョンペーパーで言及した方が良いのではないか。

本アプリケーションペーパーは、気候変動に関連する マーケットコンダクトに焦点を当てているが、各法域 においては消費者を保護するための規制が既に実施さ れ、それに基づいて適切な監督がなされていると理解 している。気候変動に関連するマーケットコンダクト について新たな監督・規制の枠組みが必要なのではな く、基本的には消費者保護のための既存の規制・監督 のスコープに含まれるものと考える。

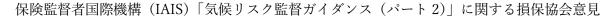
We understand that this AP focuses on market conduct issues and thus emphasizes meeting consumer demand. On the other hand, on the premise of compliance with market conduct, insurers also need to conduct appropriate product design (including the setting of exclusions, etc.), pricing, risk management, and capital and solvency management. Consideration in terms of such responses made within the existing prudential framework should also be mentioned in the AP. In addition, protection gaps are a major issue that needs to be resolved by multiple stakeholders in the public and private sectors, and cannot be solved only through the conduct of insurers and insurance intermediaries. This point should also be mentioned in this AP.

While this AP focuses on market conduct related to climate change, it is our understanding that each jurisdiction already has regulations in place to protect consumers and appropriate supervision based on these regulations. Therefore, a new supervisory and regulatory framework is not needed for climate risk market conduct, which is essentially within the scope of existing regulations and supervision for consumer protection.

保険セクターにおける気候リスク・ 21 マーケットコンダクト問題の分野に

「保険業界以外の他業界(の監督当局)との連携強 化」も検討に値するものと考える。修理費高騰が保険

We believe that "strengthening cooperation with industries (and/or their supervisors) other than the





おいて、IAIS が取り組むべき追加的な作業はあるか。

金支払額を増加させ、それが補償ギャップや保険料の 上昇等に繋がる一要素になっているとすれば、保険業 界内でできる対策だけでは足りず、他業界の監督当局 と連動した保険金削減取組なども考えていく必要があ ると考える。 insurance industry" is also worth considering. If soaring repair costs increase insurance claim payments, which is one of the factors that lead to protection gaps, higher insurance premiums, etc., it is not enough to take measures within the insurance industry. It is necessary to consider measures to reduce insurance claims in conjunction with supervisors in other industries.



保険セクターにおける気候リスクのシナリオ分析に関するアプリケーションペーパー

番号		損保協会意見(和文)	損保協会意見(英文)
2	セクション1 イントロダクション	パラグラフ1の4行目に「合意した方針」(agreed	Paragraph 1 (4th line) refers to "agreed policies", but
	に対する一般的意見	policies)とあるが、UNFCCC の下で政策レベルで合意	we recognize that what has been agreed at the policy
		されているものは限られると認識しており、「合意した	level under the UNFCCC is limited. Therefore, "agreed
		ゴール」(agreed goals)の方が相応しい表現ではない	goals" would be more appropriate.
		かと思われる。	
			We agree with what Paragraph 5 describes. While
		パラグラフ5に同意する。気候関連シナリオ分析は、保	climate-related scenario analysis has great potential to
		険セクターのリスクの把握に役立つ可能性は大きいと考	be useful in understanding risks in the insurance sector,
		えるが、比較的新しい分析方法であり、保険監督への導	it is a relatively new analysis method. Therefore, the
		入や保険会社の具体的な意思決定(保険引受や投資等)	methodology and data to be used have not yet been
		への活用、および分析結果の対外開示に向けては、手法	fully established and developed toward its introduction
		や使用するデータが未だ十分には確立・整備されていな	into insurance supervision, its use in specific decision
		いと理解している。今後、各国当局や保険会社間で試行	making by insurance companies (e.g., underwriting and
		錯誤(exploring exercise)を行いながら精錬していく必	investment), and public disclosure of its results. It is
		要があると考える。	necessary to refine the method by exploring exercises
			among jurisdictional authorities and insurance
			companies.
3	セクション2 シナリオ分析とスト	パラグラフ 10 に、「監督者はシナリオが十分フォワー	Paragraph 10 describes that "supervisors should
	レステストに関するコメント	ドルッキングであることを確実に(ensure)すべき」、	ensure that scenarios are sufficiently forward-looking".
		とあるが、特に将来時点での保険引受のエクスポージャ	However, to "ensure" seems very difficult, because
		一や、将来時点での防災インフラの整備状況を踏まえた	underwriting exposures at a future point in time, and
		脆弱性は不確実であり続けるため、"ensure"は大変困難	vulnerabilities based on the development of disaster
		と思われる。「監督者はシナリオ分析演習のプロポーシ	prevention infrastructure at a future point in time, will
		ョナリティを考慮する必要がある」ともあり、複雑さや	continue to be uncertain. The same paragraph also
			states that "supervisors need to consider the



		実現可能性を考慮して改善を図り続ける意図であること	proportionality of exercises". We would like to confirm
		を確認したい。	that the intent is to continue to make improvements in
			consideration of complexity and feasibility.
6	セクション 3.1 気候関連シナリオ	シナリオ分析は、個別の保険会社のリスク把握、長期的	Scenario analysis can be conducted for a variety of
	分析演習の目的に関するコメント	な時間軸(30年超)での影響、マクロプルーデンスに	purposes, such as understanding the risks of individual
		与える影響、補償ギャップに与える影響など、様々な目	insurers, long-term (over 30 years) impacts,
		的で実施することが可能であるが、シナリオの立て方で	macroprudential impacts, and impacts on protection
		アウトカムは異なる。分析結果を有益なものとするには	gaps. However, outcomes vary depending on scenario
		事前の準備が非常に重要と考える。シナリオ分析実施に	settings. To make the analysis results useful, it is
		あたっては、適切な目的の設定や、それに応じたシナリ	extremely important to prepare in advance. It is also
		オの選択、また、シナリオ設計の際の作業負担の軽減の	important to set appropriate objectives, select scenarios
		観点も、重要と考える。	accordingly, and reduce insurer workload when
			designing scenarios.
		マクロプルーデンスへの影響の理解を目的としたシナリ	
		オ分析には IAIG の参加は必要と考えるが、それら保険	While we believe that the participation of IAIGs is
		会社の海外子会社までも含めることが必要か、シナリオ	necessary for scenario analysis to understand
		分析の目的に応じて検討されるべきである。	macroprudential impacts, whether it is necessary to
			include foreign subsidiaries within the scope should be
			considered depending on the purpose of the scenario
			analysis.
7	セクション 3.2 シナリオ設計に関	マクロプルーデンスを目的にする場合、対象は IAIG が	For the purpose of understanding macroprudential
	するコメント	適切と考えるが、海外子会社をどこまで含めるか、ま	impacts, it would be appropriate to target IAIGs.
		た、海外子会社に適用されるシナリオはどのようなもの	However, regarding to what extent their foreign
		になるのかなど、シナリオ分析の目的や期待する効果、	subsidiaries should be included in the scope and what
		また、保険会社の負担も考慮されるべきである。	scenarios would be applied to these subsidiaries, the
			purpose and intended outcomes of the exercise, as well
		使用するシナリオは、NGFS など既存のシナリオを基本	as the burden on these insurers, should be considered.



とすることに賛同する。ただし、シナリオはまだ十分に確立されておらず、今後も絶え間なく洗練されていくものと考える。シナリオ分析を実施するにあたっては、その目的と、それぞれのシナリオの長所・短所や意図される成果に応じてシナリオをしっかり選択するとともに、結果の評価にあたっては、パラグラフ5のとおりシナリオ分析の不確実性と限界に十分に留意すべきである。

シナリオ分析の開示を考慮すると、保険会社の計測結果 の一貫性や比較可能性を、法域内で一定程度確保するこ とが望ましいが、その観点からは、法域内で標準アプロ ーチの設定や共通のモデルの利用も、検討に値すると考 える。

加えて、グローバルでの比較可能性の担保と地域固有の要因のバランスを取ることも併せて重要であるが、IAIS と法域内監督者の役割を考慮すると IAIS のペーパーにおいてはシナリオ策定やリスク評価の実施については真に IAIG に求める内容に限定されるべきである。

We agree that the scenarios to be used should be based on existing scenarios, such as NGFS scenarios. However, scenarios are not yet well established and would be continually refined. In conducting scenario analysis, scenarios should be firmly selected according to the exercise's objectives, the advantages and disadvantages of each scenario, and the intended outcomes. In addition, when assessing the results, the uncertainties and limitations of scenario analysis should be fully taken into account, as described in Paragraph 5.

In terms of scenario analysis disclosure, it is desirable to ensure a certain degree of consistency and comparability of measurement results among insurers within each jurisdiction. From this perspective, setting a standardized approach and using common models at the jurisdictional level would be worth considering.

Furthermore, while it is also important to strike a balance between global comparability and region-specific factors, considering the roles of IAIS and jurisdictional supervisors, what the IAIS's AP deals with in terms of scenario development and risk assessment should be limited to what IAIGs are effectively required to do.

suggest that the usefulness and complementarity of qualitative information be added in Paragraph 46.



セクション 4.1 システム上の重要 システミックリスクを把握するために、国家レベル・国 In order to understand systemic risks, it is important to 性の評価 (ICP 24.3) に関するコメ 際レベルでの課題を考慮し、シナリオを策定することは develop scenarios that take into account issues at both ント 重要と考えるが、一方で、例えば、国レベルで、複数の the national and international levels. However, it is セクターにまたがる影響度を測定するシナリオ分析に assumed, for example, that scenario analysis to は、かなりの複雑性が伴うと推測される。したがって、 measure impacts across multiple sectors at the national 実施にあたっては、期待される結果と作業負担のバラン level involves considerable complexity. Therefore, when conducting scenario analysis exercises, careful スをとること、また、実行可能性について十分な検討が consideration should be given to balancing intended 必要である。 outcomes and workload, as well as feasibility. リスク集中に伴う再保険への影響については、保険会社 The impact of risk concentration on reinsurance is (出再者) と再保険会社(受再者)の引受方針・経営判 断が大きく影響し、また、世界的な再保険市場の動向や greatly influenced by the underwriting policies and CAT Bond に代表される資本市場の影響もあることか management decisions of insurers (cedents) and ら、効果のあるシナリオ分析には、これらの点も考慮し reinsurers, as well as by trends in the global たシナリオ設計が求められると思われる。 reinsurance market and capital markets as represented by cat bonds. Effective scenario analysis requires scenario design that takes these factors into account. 本ペーパー全体を通じて言えることだが、特にパラグラ 10 セクション 4.2 監督上の対応 (ICP) Throughout this AP, but especially in the second sub-24.4) に関するコメント フ 46 の項目 c.「更なるシナリオ演習に向けたシナリオ paragraph of Paragraph 46 c. "Scenario analysis to 分析」の2段落目で顕著なのは、定量化のみが強調され inform further scenario exercises", there is an emphasis ている点である。定量情報の重要性は否定しないが、特 only on quantification. While we do not deny the 定のモデルにより得られる定量情報を過信することにも importance of quantitative information, we believe that there is also a risk in overconfidence in quantitative リスクがあるのではないか。パラグラフ 63 にて定性情 報にも言及されているが、当パラグラフにおいても定性 information obtained by a particular model. As 情報の有用性や補完性について付言することを提案す Paragraph 63 refers to qualitative information, we

る。

approaches and use of common models at the



法域内で保険会社に共通の問題が認められる場合、個々 の会社の問題に対して法域内外のベストプラクティスの Where there are common issues identified across a 共有を行うことは有用であると考える。 number of insurers within a jurisdiction, it is useful to share best practices in and out of the jurisdiction 気候関連の財務情報開示基準 (Climate change financial regarding individual insurers' issues. disclosure requirements) については、グローバルな比 較可能性を確保するために、グローバルベースラインと As for climate change financial disclosure して策定された IFRS S1・S2 基準に準拠するのが望ま requirements, to ensure global comparability, it is しいと考える。 desirable to comply with IFRS S1 and S2, which were developed to be a global baseline. セクション 4.3 透明性 (ICP 24.5) シナリオ分析の結果を開示することは透明性を高めると While disclosing the results of scenario analysis is 11 に関するコメント useful for the purpose of increasing transparency, in いう目的からは有用であると考えるものの、開示に向け ては、シナリオ分析に内在する不確実性や、利用できる terms of disclosures, there are issues such as the データに制限があるなどの課題がある。また、保険会社 uncertainty inherent in scenario analysis and the limited が異なるデータセットや異なるモデルを利用した場合、 data available. In addition, consistency among insurers また、経営判断を含むシナリオ分析の場合には、保険会 may be compromised if insurers use different data sets 社間の一貫性が損なわれる可能性もあり、開示に関して or different models, or if scenario analysis involves は慎重な対応が求められる。開示に資するシナリオ分析 management decisions. Therefore, a cautious に向け、IAIS のペーパーにおいてはシナリオ策定やリ approach is required regarding disclosures. In order to スク評価の実施については真に IAIG に求める内容に限 ensure scenario analysis that contributes to meaningful 定されるべきである。また、「グローバルでの比較可能 disclosures, what the IAIS's AP deals with in terms of 性」と「地域固有の要因」のバランスを取ることも重要 scenario development and risk assessment should be であり、同一法域内の保険会社の計算結果の一貫性や比 limited to what IAIGs are effectively required to do. Furthermore, as it is important to strike a balance 較可能性の確保に向けては、法域内のアプローチの標準 化・共通のモデルの使用なども検討されるべきと考え between "global comparability" and "region-specific factors", measures such as the standardization of る。



			ヘク
		パラグラフ 51 で言及されているベストプラクティスに	jurisdictional level should also be considered to ensure
		ついて、何がベストかはいまだ定まっておらず、また、	consistency and comparability of measurement results
		目的によっても異なる。事例の共有自体は有益と考える	among insurers within each jurisdiction.
		が、保険会社の行動がベストプラクティスに統一される	
		ことで、引受行動の多様性(Diversity)が損なわれると	With regard to the best practices referred to in
		いった弊害が生じることも考えられる。	Paragraph 51, it has not yet been determined what
			practices are considered best; best practices vary
			depending on the purpose. While we believe that
			sharing examples is beneficial in itself, it may have the
			adverse effect of undermining diversity in underwriting
			behavior if the actions of insurance companies are
			standardized into a particular set of best practices.
13	セクション 5.1 ERM フレームワー	気候リスクは ORSA で考慮すべき重要なリスクであ	Although climate risk is an important risk to consider in
	クのレビュー(ICP 16.16)に関する	り、ERM でも考慮すべきではあるが、シナリオ分析実	the ORSA and ERM, how and to what extent scenario
	コメント	施に内在する複雑性、不確実性、また作業負荷を考慮す	analysis exercises are reflected in the ORSA and ERM
		ると、ORSA や ERM への反映の手法・程度は慎重に検	should be carefully considered in view of the complexity
		討すべきと考える。また、気候リスクシナリオ分析の時	and uncertainty inherent in these exercises and the
		間軸は、通常の ORSA や ERM で扱うものと大きく異な	workload involved. In addition, since time horizons for
		るため、既存のフレームワークでの対応が可能かについ	climate risk scenario analysis is very different from the
		ての検討も必要となる。	ones for usual ORSA and ERM, it will be necessary to
			consider whether existing frameworks can handle this
			issue.
16	セクション 5.4 保険会社の ORSA	気候変動リスクは保険会社にとって重要なリスクであ	Climate change risks are important to insurers and
	(16.12) (16.14) に関するコメン	り、ORSA にて考慮されるべきである。シナリオ分析の	should be considered in the ORSA. Technical
	٢	ORSA への反映については、例えば、より長い期間での	difficulties, such as evaluation with longer time horizons
		評価、また、より多様なリスク(物理的リスク、移行リ	and analysis of more diverse risks (physical risks,
		スク、訴訟リスク)の分析など、技術的な困難さを伴う	transition risks, and litigation risks), are expected in



			一
		ことが想定される。ORSA へのシナリオ分析の組み入れ	incorporating scenario analysis in the ORSA. These
		については、このような技術的な難しさも十分考慮すべ	should be fully taken into account.
		きである。	
			While the 1st bullet of Paragraph 65 states
		パラグラフ 65 の 1 点目について、「温暖化が生命・医	"shouldalso consider how hotter climates may impact
		療保険に与える影響をも考慮すべき」とあるが、保険会	life and health insurance liabilities", it is possible that,
		社によっては ORSA に記載するほどのインパクトや重	for some insurers, the related impact or importance are
		要性がないことも考えられ、「重要な場合には」	not significant enough to be included in the ORSA.
		(when material)を追記したり、「べき」(should)	Therefore, we suggest adding "when material" or
		ではなく、「考慮することもできる」(could also	changing "should" to "could also consider".
		consider)といった表現にするべきと考える。	
			Regarding the 3rd bullet in Paragraph 65, as mentioned
		パラグラフ 65 の 3 点目について、パラグラフ 15 に記	in Paragraph 15, the likelihood of occurrence and
		載されている通り、法域ごとの法制度により訴訟リスク	impact of litigation risks vary greatly depending on the
		の発現可能性や影響は大きく異なる。また、過去事例が	legal system of each jurisdiction. In addition, as the
		ない法域では分析のフィージビリティにかけるため、	analysis would lack feasibility in jurisdictions where
		「適切な場合」(where appropriate)あるいは「可能な	there are no past cases, conditions such as "where
		場合」(where possible)などの条件を追記していただ	appropriate" or "where possible" should be added.
		きたい。	
17	セクション 5.5 リスク管理方針へ	資産運用リスクと保険引受リスクの相互の関連、また、	While it is useful to understand the impact of climate
	のシナリオ分析の統合(ICP 16.5、	ALM における資産・負債について、気候変動リスクの	change risk on the interconnectedness of asset
	16.6、16.7)に関するコメント	影響を理解することは有用であるが、実際のシナリオ分	management risk and underwriting risk, as well as on
		析には複雑さや技術的な困難が伴うことが想定されるた	assets and liabilities in ALM, scenario analysis is
		め、その実行可能性や保険会社の業務負荷についての配	expected to involve complexity and technical difficulties.
		慮が必要である。	Therefore, consideration should be given to its
			feasibility and the workload on insurers.
		パラグラフ 71 では、シナリオ分析が導く緩和戦略とし	
		•	•



て、投資先とのエンゲージメント、制限リスト、ダイベストメントリストが例示されているが、脱炭素化が困難な(hard-to-abate)セクターのトランジションに向けた働き掛けの要素が欠落している。パラグラフ 70 においても、セクター・リミットの設定の例が挙げられるなど、ダイベストメントが奨励されているような印象を与える。本ペーパーが安易なダイベストメントの誘発を抑え、投資先の脱炭素化を促すエンゲージメントの重要性に対する気付きを促すためにも、トランジション・ファイナンスへの言及を提案する。

Paragraph 71 refers to investee engagement, restricted lists, and divestment lists as examples of mitigation strategies prompted by scenario analysis. However, it lacks elements of engagement to encourage transition of hard-to-abate sectors. Paragraph 70 also refers to an example of sectoral investment limits, leaving an impression that divestment is encouraged. For this AP to prevent the inducement of ill-considered divestment and to promote awareness of the importance of engagement to encourage the decarbonization of the investee, we suggest making reference to transition finance.

18 セクション 5.6 リスク選好方針 (ICP 16.4) に関するコメント 気候リスクシナリオ分析により、リスク選好方針の抵触 可能性を理解することは有用ではあるが、シナリオ分析 には複雑性・不確実性・技術的困難が伴い、そのため分 析結果の活用には限界がある。シナリオ分析の結果をリ スク選好方針の抵触判断に用いる際には、このような限 界を十分踏まえ、慎重に行うべきである。

気候変動に起因するリスクは他のリスクと比較して長期的な影響となるため、リスク選好方針で同じリスクカテゴリを扱う場合でも記載が複雑になることが予想される。また、リスク選好は、事業ポートフォリオ全体に含まれる様々なリスクを考慮して決定されるものであり、気候リスクに関するシナリオ分析結果をもってリスク選好方針の判定に用いることは必ずしも実行可能とは限らないことにも留意が必要である。

Although it is useful to understand potential breaches to the risk appetite statement through climate risk scenario analysis, the complexity, uncertainty, and technical difficulties involved in scenario analysis limit the use of the analysis results. When using the results of scenario analysis to determine breaches to the risk appetite statement, these limitations should be carefully considered.

Since risks attributable to climate change have a longer-term impact than other risks, even when a risk appetite statement deals with the same risk categories, it is expected that the description will be more complex. It should also be noted that risk appetite is determined by considering various risks in the overall business



			portfolio, and it is not always feasible to use the results
			of climate risk scenario analysis for assessment in a
			risk appetite statement.
19	セクション 5.7 取締役会の説明責	取締役会が気候変動リスクをマテリアルリスクと認識す	In order to recognize climate change risks as material
	任に関するコメント(ICP 16.11)	ることや気候変動リスクが保険会社に与える影響につき	risks and to understand the impact of these risks on the
		理解するため、取締役会が十分な情報の提供を受けるこ	individual insurer, if relevant for such individual insurer,
		とは重要である。しかし、シナリオ分析の手法、報告す	it is important for the board of directors to be well
		る内容、論議すべき項目は、保険会社の、自社のリスク	informed. However, the methodology for scenario
		プロファイル、事業内容・規模などに応じて設定される	analysis, the content to be reported, and the items to be
		べきである。	discussed should be based on the insurer's risk profile,
			as well as the nature and size of its business.
		パラグラフ 78 の 3 つ目のブレットポイントの第 2 セン	
		テンス(Management actions should be)について、	As for the 2nd sentence of the 3rd bullet of Paragraph
		シナリオ分析の時間軸や前提の置き方によってマネジメ	78 ("Management actions should be concrete,
		ントアクションは変わり得ること、短期間で実施可能な	applicable within a short timeframe and tailored to the
		対策がどのようなものなのかもマーケット状況によって	specific risk profile of the insurer"), management
		異なることから、マネジメントアクションはハイレベル	actions can vary depending on the time horizon and the
		な方向性や、ディシジョンツリーのようなものにならざ	assumptions of scenario analysis. What measures can
		るを得ないケースも十分に考えられる。	be implemented in a short timeframe can also vary
			according to market conditions. Therefore, there may
			well be cases where management actions have to be
			similar to a high-level direction or something like a
			decision tree.
20	アプリケーションペーパー草案は、	ボックス2では、シナリオ分析とプロテクションギャッ	Box 2 describes scenario analysis and protection gaps.
	監督当局および保険者にとって有用	プについて記述している。その意図には賛同するが、プ	While we agree with this intention, there are many
	なツールとなるよう十分な詳細な事	ロテクションギャップは消費者や再保険者の行動など変	variables regarding protection gaps, such as consumer
	項を提供しているか。	数が多く、シナリオ分析で扱うことは困難である。ま	and reinsurer behaviors, making them difficult to handle



た、保険会社の行うシナリオ分析は個社のビジネスに関するボトムアップの分析である一方、プロテクションギャップはマクロの事象であり、両者のスコープは異なるので、前者によって後者に関する有意な分析ができるとは思われない。当局が行うマクロなシナリオ分析を用いることは考えられるが、その場合でもプロテクションギャップの態様は結局個々の保険会社の引受行動や消費者の購買行動に左右されるため、前提条件や仮説の置き方次第で結果が大きく異なる可能性が高い。

in scenario analysis. In addition, while scenario analysis conducted by an insurer is a bottom-up analysis of the individual company's businesses, protection gaps are a macro matter. Since the scopes of the two are different, we do not believe that the former can provide a meaningful analysis of the latter. It is possible to use macro scenario analysis conducted by supervisory authorities, but even in that case, protection gaps will ultimately depend on the underwriting behavior of individual insurance companies and the purchasing behavior of consumers. Therefore, the results are likely to differ significantly depending on the assumptions and hypotheses made.

21 アプリケーションペーパーにおいて、保険会社の気候リスクの様々な側面、すなわち、(i) 移行、(ii) 物理的リスクおよび (iii) 気候関連訴訟リスクは、保険会社のバランスシートの両側に効果的にカバーされているか。

「(iii) 気候関連訴訟リスクは、保険会社のバランスシートの両側に効果的にカバーされているか」については、投資先(資産サイド)や D&O などの保険引受(負債サイド)における訴訟リスクへの言及と理解できるが、法域毎に法制度が異なるため、気候訴訟リスクのエクスポージャーやリスク分量に差異があると思われる。そのため、本アプリケーションペーパーにおいて気候関連訴訟リスクがバランスシートの両側に対して効果的に記載されているか検討するのは難しい側面がある。

As for (iii), while it can be understood as a reference to litigation risks in the investee (asset side) and underwriting such as D&O (liability side), there may be differences in exposures and risk quantities for climate-related litigation risks due to differences in jurisdictional legal systems. This makes it difficult to examine whether climate-related litigation risks are effectively covered in the AP for both sides of insurer balance sheets.